

「アオコの毒素 高濃度で検出」諫早湾調査

諫早湾調査の教授らが会見

【西日本新聞・10月27日】国営諫

早湾干拓事業の潮受け堤防で仕切られた調整池内で発生しているアオコをめぐり、熊本県立大の堤裕昭教授と熊本保健科学大の高橋徹教授は26日、熊本県庁で会見し、諫早湾側の排水門近くの天然カキから、アオコからつくられる毒素・ミクロシチンを3回にわたり高濃度で検出したと発表した。

沖合の養殖カキからは検出されず、すぐに人体に影響が出るものではないとしたものの、「肝臓がんなどを引き起こす毒素で、放置は危険。アオコは海水で増殖できなくなるため、早急に開門すべきだ」と主張した。

両教授によると、2007年から行った調査で、同年12月、08年3月、09年11月の3回、諫早湾南部排水門近くのカキから世界保健機関(WHO)が定める基準を超えるミクロシチンを検出したという。

長崎県は10年1月に実施した同様の調査で「毒素は定量下限値以下だった」と公表している。同県の諫早湾干拓課は「昨年の調査以降、調整池の環境は大きく変化していないので認識は変わらない。風評被害が懸念されるので国には調査を引き続き要望していきたい」としている。

原口民主県連代表が農相

批判「我々の努力無視」

【佐賀新聞・10月23日】民主党

佐賀県連代表の原口一博元総務相は22日の県連常任幹事会で、鹿野道彦農相が諫早湾干拓排水門の制限開門による調査方針を示していることについて「猛烈に抗議した。われわれの努力を無視している。来月国会内で開く集会は糾弾の場になるかもしれない」と厳しく批判した。原口氏は農水省が全開門の対策工事を約1千億円とした試算も「最初からやる気がなく、開門しないと断じた」と断じた。(略)

諫早百条委で関係者を尋問

谷川・金子親族企業入植で

【長崎新聞・10月20日】国営諫

早湾干拓事業の営農地に前長崎県知事と自民党衆議院議員の親族企業が入植した手続きを調べる県議会の調査特別委員会(百条委)は19日開き、選考に携わった関係者3人を証人尋問した。入植を決めた県農業振興公社の元事務局長、親族企業の個別調査を担当した元職員2人。3人は、親族企業の収支計画な

「鬼気迫る法廷」

【西日本新聞連載「たたかい続ける」ということ・弁護士馬奈木昭雄さん】10月20日、干拓工事の差し止めを求め、仮処分申請とともに裁判を起こしたのが2002年1月。赤潮の発生で養殖ノリが大凶作に襲われた年から丸2年になるうとしていました。私たちは出せる証拠をすべてそろえ、裁判官に「早く結論(仮処分)を出せ」と迫る。出せ、まだだ、というやりとりで4年になります。この前年の冬もノリが凶作で、自殺者が相次いでいたのです。全国ニュースになった無理心中事件もありました。

ノリの不漁で資金繰りに困り、多額の借金に苦しんだ漁民が母親を道連れに死のうとしたんです。母は亡くなった。自らの首を切り付けた

がら死にきれなかった彼は「全身の力が抜けた」と供述したそうです。彼は承諾殺人罪で起訴されました。漁民の皆さんは、寛大な判決を求めて4千人分の嘆願署名を裁判所に提出。弁護士は「干拓事業が『宝の海』を『死の海』にした。被告人は国の事業の被害者だ」と訴えた。結果、執行猶予が付きます。弁護士の間でも刑が重くなることで有名な裁判官だったんですけれどね。判決の日、裁判官は「自殺しようとしたとき『力が抜けた』のは、お母さんが余分な力を持っていつてくれたんだと思います」と、母親の分もきちんと生きるよう諭したと聞きました。

そして04年7月、私たちの有明訴訟の法廷です。原告の大鋸(おおが)武吉さんが意見陳述しました。大鋸さんはタイラギ漁の漁師。干拓事業で最初に壊滅的な打撃を受けたのが、タイラギなどの貝類でした。

「今年1月に60代のタイラギ漁師の奥さんが自殺しました」「4月、働き盛りの40代のクルマエビ漁師が自殺しました」…。続く不漁のしかかる借金。仲間の苦悩を背負い、大鋸さんは詰め寄った。

「裁判長、あと何人漁民が自殺すれば、命を失えば仮処分を出してくれますか」。

鬼気迫る法廷でした。翌月、佐賀地裁の榎下義康裁判長は工事差し止めを命じました。